

なぜハルムスはトゥファノフから離反したか ——人間関係と詩学の観点から¹

小澤裕之

1. はじめに

本稿の狙いは、ハルムス（1905-1942）がその師トゥファノフ（1877-1942?）から離別した理由を探ることである。1920年代半ばに詩作を開始した二十歳前後のハルムスにとって、既に齢50に近かったトゥファノフは兄弟というより父であり、同志というより指導者であった。なぜハルムスはその「父」から離反し、同年代の仲間たちと別の文学グループを発足させるに至ったのか、その原因究明を行いたい。

初期ハルムスの詩学を研究するに当たり、トゥファノフとの関係を究明することは避けて通れない課題である。なぜならば、ハルムスの最初期の詩作にはトゥファノフの影響が色濃く表れているからである。そしてそのような詩作品の包蔵していた特徴が次第に薄れ、彼の詩が新たな特質を獲得し始めるとすれば、そこにトゥファノフとの関係性の変化を見ることは必要不可欠である。無論、トゥファノフとの関係性においてのみハルムスの初期の詩学に照明を当てていくべきではないが、この検証が欠かせないことは論を俟たない。

また、トゥファノフからハルムスが離反した原因について、誤認と思われる解釈が長い間通用していた。これも正されねばならないだろう。

2. 先行研究

1924年から1927年にかけて、ハルムスがトゥファノフから離反してゆく過程で、ハルムスの詩学が変容してくることは既に明らかにされている。² そして彼がトゥファノフの元を去った理由は、両者間の詩学上の対立であるとこれまで論じられてきた。³ そもそもトゥファノフとハルムスの師弟関係に亀裂を認めた最初期の研究はアレクサンドロフの論文であるが、⁴ ジャッカー／ウスチノフはこれを更に仔細に眺め、その原因を双方の

¹ 本稿は、2012年度日露青年交流事業若手研究者等フェローシップ《日本人研究者派遣》の支援によるものである。

² 小澤裕之「オベリウ以前のハルムスの詩学」『SLAVISTIKA』XXVII, 2012年。

³ Jaccard J.P., Устинов А. Заумник Даниил Хармс: начало пути // Wiener Slawistischer Almanach. Bd. 27, 1991. С. 162.

⁴ Александров А. Материалы Д.И. Хармса в рукописном отделе Пушкинского Дома // Ежегодник

詩学上の対立に還元した。つまりトゥファノフはザーウミに国際性を付与していたのに対して、ハルムスはザーウミに国民性（ナショナリティ）を付与していたため、彼らはやがて反目し、オベリウ宣言においてはトゥファノフを揶揄するべく「反ザーウミ」が謳われたと言うのである。このような見方に対してその後明確な反論は提出されていないが、しかしトゥファノフのザーウミ観が一貫したものではないこと、またハルムスにおけるザーウミのナショナリティがいかなるものかが明瞭でないことから、⁵ この主張には首肯できない。更に近年になって両者を巡る新資料が公刊されるに及び、別の視点を探ることが可能になった。

その一つが、ドゥヴィニャチナとクルサノフの論文である。⁶ これはタイトルの示す通り、初期ハルムスの詩学を追究するものというよりも、彼が所属した文学グループ「左翼」の盛衰を丹念に記述するものである。また付録の「左翼」グループの議事録や報告メモは膨大であり、その意味でこれは一種の資料集であって、ハルムスの詩学に関する卓見があるわけではないが、しかしそれを考察するに当たって欠かすことのできない論文／資料となりつつある。

もう一つはククシキナの論文である。⁷ ハルムスとヴヴェジェンスキーが、レニングラード詩人同盟及びレニングラード作家同盟とどのような関係を持っていたかを極めて詳細に論じている一方で、やはり彼らの詩学への踏み込んだ言及は見られない。しかし、幾つかのグループに所属する 1920 年代のハルムスの文学的生活が時系列に沿って事細かに記述されており、その全体像を把握することが容易になっている。新事実も明らかにされており、重要な論文である。

これら新しい論文に共通しているのは、ハルムスと文学グループとの関わりを、詩学的側面からではなく、世俗的側面から捉え直した点である。例えばククシキナは詩人同盟内部における監査委員の選挙の様子、ハルムスやヴヴェジェンスキー、トゥファノフの立候補と落選の様子を詳らかにしている。このような非詩学的アプローチは、トゥファノフと

рукописного отдела Пушкинского Дома на 1978 год. Л., 1980.

⁵ 1925 年の手記にハルムスは次のように認めている。「仮にザーウミ以外のものからナショナリティを要求できるとすれば、ザーウミからは尚更である」。Хармс Д.И. Полное собрание сочинений. Записные книжки. Дневник. В 2 кн. Кн. 1. СПб., 2002. С. 49. ただし、ザーウミのナショナリティに関するハルムスの文言はこれのみであり、これだけに依拠してハルムスの志向性を測ることはやや乱暴である。したがって、ザーウミのナショナリティを巡るハルムスとトゥファノフとの争点そのものが解消されうる。

⁶ Двинатина Т.М., Крусанов А.В. (вступ. ст., публ. и коммент) К истории «Левого Фланга» Ленинградского Отделения Союза Поэтов // Русская литература. 2008, № 4.

⁷ Кукушкина Т.А. Александр Введенский и Даниил Хармс в Ленинградском Союзе Поэтов и Ленинградском Союзе Писателей // Ежегодник рукописного отдела Пушкинского Дома на 2007-2008 гг., СПб., 2010.

ハルムスの関係性にも新しい光を投げかけるだろう。両者の相互関係を明らかにするには、ジャッカールらによる詩学分析だけでは不十分であり、こうしたアプローチが必要だったのである。機は熟したと考える。次章では、双方の詩学の変遷と共に、双方の人間関係の変遷を追いたい。

3. トウファノフとハルムス

3-1. トウファノフの詩学の変遷

初期ハルムス研究に着手した際、必ず考慮されねばならない人物が、未来派詩人トゥファノフである。駆け出しのハルムスはこのトゥファノフの「絶対的な影響」下において詩作を行ったのであり、⁸ 1920年代半ばのハルムスの詩学の内実を詳らかにするためには、トゥファノフの詩学をつぶさに眺める必要がある。実際、アレクサンドロフがその論文で両者の影響関係を指摘して以来、初期ハルムスを扱う論文の多くはトゥファノフを参照項としており、その傾向は現在に至るまで続いている。ただし、前章でも触れた通り、その影響関係は詩学の領域にのみ留まるべきではなく、人間関係の領域でも検討されるべきである。

アレクサンドル・トゥファノフは、ジャッカールとニコリスカヤによる『ウシクイニキ Ушкуйники』の再刊（1991年）で脚光を浴び始めたが、⁹ 近年その研究は新たな段階に突入しつつある。アーカイヴ資料を駆使した幾人かの研究者によって、彼の知られざる人生や詩学が詳らかにされ始めている。その結果、彼とハルムスやヴヴェジェンスキーとの関係にも再考の余地が現れた。本章はそういった研究成果を踏まえ、トゥファノフとハルムスとの間の師弟像を再構築し、両者の相互関係に新たな光を当てるものである。

トゥファノフは初めリアリストとして自らを意識し、次いでシンボリストへ転向した。¹⁰ 彼がザーウミ派へ再び衣替えするのは、1917-1918年頃のことである。¹¹ アルハンゲリスクでチャストゥーシカを研究したトゥファノフは、ベルクソン哲学を摂取、フォルマリストの著作に触れ、徐々に自らの詩学を形作ってゆく。それが結実したのが『ザーウミへ』という詩論及び詩集である。そこでは、「言葉の復活」ではなく「音素機能の復活」が提唱され、個々の音に備わった一定の機能が追究されている。¹² 彼はとりわけ子音に着目し、

⁸ Jaccard, Устинов. Заумник Даниил Хармс. С. 160.

⁹ Туфанов А. Ушкуйники. Berkeley, 1991.

¹⁰ Двинятина Т.М., Крусанов А.В. (вступ. ст., публ. и коммент) Эстетика «Становления» А.В. Туфанова: статьи и выступления конца 1910-х–начала 1920-х гг. // Ежегодник рукописного отдела Пушкинского Дома на 2003-2004 гг., СПб., 2007. С. 617.

¹¹ Там же. С. 619.

¹² Туфанов А. К зауми. Фоническая музыка и функции согласных фонем. Пб., 1924. С. 9.

どの子音の音もそれぞれの動きの感覚に結び付いていることを発見した。それは 20 の法則として纏め上げられており、例えば「法則」の第一項目である [m] の音は以下のように説明される。「空間的に閉鎖された、表層下では自由な感覚と心理的に連結している」。¹³ 無論、このような特異な詩学は既にロシア文学史に先例がある。フレーブニコフである。「フレーブニコフとトゥファノフにおける個々の音の性格は一致している」場合さえあり、¹⁴ その影響関係は明らかである。実際、1922 年にフレーブニコフが死去したのち、トゥファノフは「詩人フレーブニコフ記念サークル」を組織しようとし、「フレーブニコフ記念」の夕べに登壇、自らを「時間王国のヴェレミールⅡ世」「ザーウミ地球議長」と宣言している。¹⁵ ただし、フレーブニコフが専ら「ロシア語の言語現象」において法則を探求したのに対して、¹⁶ トゥファノフは自分の法則の構築のためにまず主として英語の形態素を考察し、その結果をセム語の音韻現象や日本語の音の身振りで、更にはロシアのチャストゥシカの和音でチェックしている。¹⁷ つまり、遙かに国際的なのだ。ニコリスカヤによれば、フレーブニコフとトゥファノフの主要な違いは、前者にとって重要であったザーウミのナショナリティをこの時期のトゥファノフが拒絶していた点にある。¹⁸ トゥファノフが自らの法則に立脚した詩を「音韻的音楽」として、「あらゆる民族に等しく〈理解される〉」と書いたのは、¹⁹ 彼の多言語研究を基盤とした言語的ユートピアからすれば当然である。『春』と題された次のような詩をトゥファノフは「音韻的音楽」の代表例として掲げている。最初の二連だけを引用しよう。

Сиинь соон сийй селле соонг се

Сиинг сеельф сиик сигнал сеель синь

Лиий левиш ляак ляйсиньлюк

Ляай луглет льян лилин лед²⁰

¹³ Там же. С. 14.

¹⁴ Никольская Т.Л. Заместитель председателя земного шара // Иванов Вяч. Вс., Паперный З.С., Парнис А.Е. (сост.) Мир Велимира Хлебникова: Статьи. Исследования (1911-1998). М., 2000. С. 450.

¹⁵ Двинятина, Крусанов. Эстетика «Становления» А.В.Туфанова. С. 622. なお、トゥファノフは「Велимир」を「Велемир」と表記した。

¹⁶ Туфанов. К зауми. С. 11.

¹⁷ Там же. С. 10.

¹⁸ Никольская. Заместитель председателя земного шара. С. 451.

¹⁹ Туфанов. К зауми. С. 12.

²⁰ Там же. С. 13. 同書 35 頁にも同じ詩が掲載されている。ただし、第二連の第一行の最終句「ляйсиньлюк」は、35 頁の詩では「ляйсииньлюк」となっており、「и」の数が異なる。

一見して明らかなように、ここには通常の辞書にあるような単語はほとんどなく、特殊な造語が連続している。いずれの単語も子音から始まっており、第一連は全て «с», 第二連は全て «ш» から始まる単語である。トゥファノフによれば, [s] の音が心理的に連結しているのは「光線が二重の波動になっている感覚」であり,²¹ [ш] の音は「波線が動点に向かう感覚」である。²² 第三連, 第四連の語頭もやはり [s] ないし [ш] の音のみである。エンデルによって作成された巻末の「言語音一覧表」も併せて勘案すると、恐らく春の陽をイメージした詩ではないかと思われるが、これは完全に感覚的な詩であり、理性を超えて情動に直接働きかけることが目指されているだろう。

しかしながら、「トゥファノフはまもなく「音韻的音楽」から古代スラヴ語を礎とするザーウミに移行する。フレーブニコフのように、古代スラヴ語とロシア語のアマルガムを志向したのだった」。²³ つまりザーウミにスラヴ民族のナショナリティを要求し始めるのである。その変化は、恐らくかなり早くから生じていたに違いない。それを証言するのが、ザーウミとロシア語との関係に言及した、トゥファノフが1924年に書いた文書である。

1924年4月に詩人同盟レニングラード支部が創設されると、トゥファノフは早速それに加盟し、活動を行っている。ヴヴェジェンスキーが加盟申請をしたのは、支部創設の一月後のことである。国立芸術文化研究所(ГИНХУК)の音韻論部門で、テレンチエフ指揮の下働いていたヴヴェジェンスキーは、レニングラード支部に申請用紙と共に自作の詩10篇を提出する。²⁴ 10個目の詩が書かれた紙の裏側には、支部の委員会のメンバーによる短評が記されている。そしてそこには、トゥファノフの批評も含まれていた。彼はヴヴェジェンスキーの詩に対して、次のような意見を開陳している。「それ(ザーウミ—引用者)は原言語あるいは自分の祖国の言語の力と系統的に関係していなければならない」。²⁵ プーシキンを飛び越えて一息にザーウミへ渡ってしまうことは不可能なのだ。トゥファノフは、次第にザーウミのナショナリティに自覚的になってゆく。

1925年3月、周囲の若い左翼詩人たちを結集させようとして、トゥファノフは「ザーウミ派結社 DSO」を設立する。ロシア作家事典の編集者コズミンに宛てた手紙の中でト

²¹ Там же. С. 15.

²² Там же.

²³ Никольская. Заместитель председателя земного шара. С. 452.

²⁴ この内、最初の9編の存在は早くから知られており、全集などに収録されていたが、最後の1篇は長年行方不明だった。しかし最近になって、それに対する批評と共に発見された。詳しくは以下の論文を参照せよ。Кукушкина. Александр Введенский и Даниил Хармс. С. 544-545.

²⁵ Там же. С. 548. ここでトゥファノフは、ヴヴェジェンスキーを詩人同盟に受け入れるのは可能だが、「ザーウミ派 заумник」としてではなく、「未来派 футурист」としてであることを主張している。トゥファノフにとって「未来派」とは、まだ自身のような「生成派 становлянин」の域には達していない、初心者を目指している。このトゥファノフの批評は次の文献にも収録されている。Введенский А.И. Всё. М., 2011. С. 732-733.

トゥファノフは書いている。「グループの核は3人います。私、ハルムス、ヴィギリャンスキーです。ハルムスとヴィギリャンスキーは弟子で、私のスタジオでいつも作業しています。ザーウミに傾倒し、その準備作業をしている者が更に6人います。それからレニングラードには、まだテレンチエフがいます。彼はクルチョーヌイフの弟子で、現在は我々の仕事からは離れて劇場で働いており、(養成スタジオに) ヴヴェジェンスキーという弟子を持っています。テレンチエフは私のことを「ザーウミの唯一の理論家」とみなしています。このように、レニングラードにはザーウミ派が11人いるわけです」。²⁶ ザーウミ派結社は月曜毎にトゥファノフのアパートで集会を催した。そこでは、弟子たちが自分の作品を朗読して、トゥファノフがそれを形式的・音声的側面から分析した。彼は次の月曜日までに弟子たちに練習テーマを与え、「抽象的コンポジション」「原スラヴ語及び古代ロシア語 (праславянский и древне-русский язык)」「英語、ドイツ語、その他の言語の形態素」を追究するよう求めている。²⁷ トゥファノフは先の手紙の中で、メンバーの同意を得たという結社の「宣言」を書き記している。我々にとって興味深いのは、次の二つの文言だろう。「レニングラードの結社にとって必須なのは、自然力の礎としての原スラヴ語である」。「ザーウミとは、死せる言語(ラテン語、ギリシャ語、古代ヨーロッパその他の諸言語)を復活させる芸術であり、ナショナルな基盤の上に立つ生きた言語文化の芸術である」。²⁸

1925年11月、ザーウミ派結社は「左翼 Левый Фланг」へと改組、再出発する。その規約によれば、入会するには「古代ロシア語・原スラヴ語との自然発生的な関係」が要求されていた。²⁹ ところが翌年の1月にはヴヴェジェンスキー、ハルムス、ヴィギリャンスキーがこの組織から脱退、「左翼」自体も消滅してしまう。この辺りの事情は後述するが、それには詩学的側面とグループ内の人間関係の側面からの説明が可能である。

そして1927年に出版された『ウシクイニキ』において、トゥファノフの古代ロシア語を用いたザーウミは完成する。それはこんな具合だ。

Эй, подузные, стремянные, さあ、轡職人、馬丁どもよ、

²⁶ Туфанов А. Ушкуйники. С. 176. ヴィギリャンスキー (1903-1942?) のアパートはザーウミ派の集会の場として利用されており、そうしたタベの一つでハルムスはヴヴェジェンスキーと知り合う。彼の詩は次の文献の中で読むことができる。*Двнятина, Крусанов. К истории «Левого Фланга». С. 193-200.*

²⁷ Там же. С. 178.

²⁸ Там же. 1925年10月、レニングラードのザーウミ派の集会においてこの宣言は発表された。従来この集会の日付は1925年10月17日であるとされていたが、正確には10月16日であるという。*Кукушкина. Александр Введенский и Даниил Хармс. С. 550.* この日は金曜日であり、詩人同盟レニングラード支部が「金曜日」で詩や文学のタベを開催していたことと符合する。

²⁹ *Двнятина и Крусанов (вступ. ст., публ. и коммент). К истории «Левого Фланга». С. 180.*

Выводи коня Туфанова:	トゥファノフの馬を引き出せ。
Я и полымем	おれは炎だ
Не ожгусь;	火傷はしない。
Но очами оловянными	だが虚ろな眼で
Погляжу с коня на паздерник,	馬上から北風を一瞥する、
Как пазгает	冬小屋の中でルーシが
В подызбице Русь... ³⁰	剥ぎ取るように…

ニコーリスカヤの「廢語辞典」によれば、³¹ «паздерник», «пазгает», «подызбице» は、それぞれ «холодный северный ветер», «драть, сдирать», «зимняя избенка» を意味している。それを基に日本語に翻訳すれば上記のようになるが、「ロシアの読者は大部分の詩の全体的な意味を把握することができるとはいえ、しかし詳解辞典を用いたとしても、文脈の中で個々の言葉の字義通りの意味を理解することが常に可能なわけではない」とニコーリスカヤは『ウシクイニキ』の解説に記している。³² 古語の使用及びそれを基にした造語によって、ロシア語を母語とする者にとっても難解な詩になっているわけである。だがそれにもかかわらず、ここには『ザーウミへ』で見られたような、「あらゆる民族に等しく〈理解される〉」詩句は存在していない。ロシア語をよく知る者にのみこの詩は「理解」されうるのである。直感に頼らずとも意味を拾うことが可能になった一方で、全ての民族に意味を伝達することは不可能になっている。『ザーウミへ』における詩が全人類に直接意味を伝えることを志向しつつ、実質それは無謀であったのに対して、『ウシクイニキ』における詩はロシア語を解する者のみを対象とし、漠とした程度であれ意味の伝達に成功しているのである。ニコーリスカヤは別の論文で書いている。「もしフレーブニコフのザーウミが「全スラヴ言語」から「人間と自然の共通言語」への進化の道を辿ったとしたら（中略）、トゥファノフは「全民衆に理解できる」音韻的音楽からスラヴ語を基盤とするザーウミへ、という逆の道を歩んだのである」。³³ フレーブニコフの拡大路線に対して、トゥファノフは縮小路線を辿るのだ。それはすなわち、トゥファノフの依拠する対象が読む者の「直感」から「理性」に変化したことを意味する。音楽的直観によって理解されるべき詩は、ロシア語という知を介して理解されるものへと変貌するのである。トゥファノフが

³⁰ Туфанов. Ушкуйники. С. 49.

³¹ Там же. С. 184-191.

³² Никольская Т.Л. Новатор-архаист («Ушкуйники» Александра Туфанова) // Туфанов. Ушкуйники. С. 105.

³³ <Никольская Т.Л.> “Орден заумников” // Russian Literature. Vol. XXII, № 1, 1987. С. 89. この論文の著者は、「Sergej Sigov」と誤記されている。

小澤裕之

ザーウミを放棄するのは既に時間の問題であった。

ザーウミに関するトゥファノフの最後の報告は、1928年1月19日の国立芸術史研究所(ГИИИ)の芸術発話室(Кабинет художественной речи)での演説だった。³⁴ 1931年、ハルムスやヴヴェジェンスキーらと共にトゥファノフは逮捕され、強制収容所を経てオリョール、ノヴゴロドへ渡り、最後はガリチの大衆食堂の階段の踊り場で栄養失調のため死去したとされる。³⁵

3-2. トゥファノフとハルムス

既に「ザーウミ派結社」のメンバーとして知られていたハルムスは、詩人同盟レニングラード支部に加盟するため、自作の詩とアンケートを支部に提出する。³⁶ このとき提出されたハルムスの詩は、トゥファノフ指導の下で創作されたものであり、師からの影響を見ないわけにはいかない。例えば「СЕК」と題された詩は以下のようなものである。抜粋を掲げる。

Н ты эт его

финьть фаньть фуньть

б м пильнео³⁷

фуньть фаньть финьть

Иа Иа Ыа

Н Н Н³⁸

Я полы мыла

Н Н Н

дриб жриб бобу (1, 36)³⁹

³⁴ Двинятина, Крусанов. Эстетика «Становления» А.В.Туфанова. С. 623.

³⁵ Там же. С. 625-629. 1930年代半ばには既にトゥファノフはリアリズムへと移行しており、1938年からは事実上文学活動を停止していたという。

³⁶ このアンケートには、「1925年10月9日」の日付が入っている。Jaccard, Устинов. Заумник Даниил Хармс. С. 166-168; Театр. 1991. №11. С. 52-53.

³⁷ 傍点は原文における強調符を表すことにする。

³⁸ ジャッカー/ウスチノフによれば、ここにハルムスは「咎めるように頭を揺する」という自注を入れている。Jaccard, Устинов. Заумник Даниил Хармс. С. 197.

³⁹ Хармс Д.И. Полное собрание сочинений. В 4 т. СПб., 1999-2001. Т. 1. С. 36. 『ハルムス全集』から引用する際には、(巻数, 頁数)と表記する。

この翻訳不可能性は、容易にトゥファノフの『ザーウミへ』を想起させる。また、詩人同盟に提出された詩は基本的にこうした極めて難解なザーウミで埋め尽くされており、そこに明確な意味を見出すのは至難である。それと並んで指摘すべきは、これらの詩が音読に向けられている点だろう。この詩の脇には「咎めるように頭を揺する」というハルムスの演劇的身振りを指示する自注があり、⁴⁰ それを傍証している。また、ザーウミ派結社においてはトゥファノフの弟子たちが自作の詩を朗読していたことを念頭に入れておく必要がある。ザーウミ派は音読を要求されていたのである。⁴¹ もちろん、ロシアの詩は伝統的に音読を求められてきたが、ザーウミ詩は内容を把握することが困難であるため、それを朗読する際は音の響きが一層前景化されると推察される。ハルムス自身、1924年頃より様々な場所に定期的に登壇して自他の詩を朗読していたことが知られているが、⁴² 彼の朗読は力強く表情に富んでいたという。⁴³ 音に力点を置いたこのような音声的ザーウミは、ハルムスのこの時期の詩作品に顕著であり、トゥファノフの音韻的音楽の絶対的な影響下にあることが窺える。更に、上に引用した詩の最終句 «дриб жриб бобу» は、クルチョーヌイフの有名な «дыр бул шыл» という詩句を連想させることも付け加えておこう。音の響きが似ているのみならず、音の自由な結合によって新たな言葉が創造されており、それが何らかの意味に還元されることはない。加えてジャッカル／ウスチノフはハルムスに固有のリズム学とズドヴィーク学とを例に出し、彼の詩学とクルチョーヌイフのそれとの継承関係を見ている。⁴⁴ クルチョーヌイフは言葉を意味の圧政から解放するために詩的闘争を行ってきたが、当然彼はザーウミを「無対象な言葉」と結合させるだろう。⁴⁵ 「ザーウミ派結社」の宣言によれば、トゥファノフにとっても「ザーウミ創作は無対象なもの」であった。⁴⁶ ハルムスの一見何も意味しない詩は、クルチョーヌイフやトゥファノフのこ

⁴⁰ 注 38 を参照せよ。

⁴¹ この点に関しては、アレクサンドロフによる詳細な分析がある。Александров. Материалы Д.И. Хармса. С. 69-70.

⁴² Кобринский А.А. Даниил Хармс. М., 2008. С. 22; Александров А. Чудодей (личность и творчество Даниила Хармса) // Хармс Д.И. Полет в небеса. Л., 1991. С. 13.

⁴³ ジャッカルは、幾名もの同時代人の回想を引用してこのことを裏付けている。Жаккар Ж.-Ф. Даниил Хармс и конец русского авангарда. Перовская Ф.А. (перевод) СПб., 1995. С. 20, 270.

⁴⁴ Jaccard, Устинов. Заумник Даниил Хармс. С. 163-164. 詩におけるズドヴィークはクルチョーヌイフの創造した概念＝手法である。詳しくは以下の文献を参照せよ。Крученых А.Е. 500 новых острот и каламбуров Пушкина // Крученых А.Е. Избранное. München, 1973; Крученых А.Е. Сдвигология русского стиха // Крученых А.Е. Кукиш прощаякам. М.-Таллин, 1992.

⁴⁵ クルチョーヌイフとマレーヴィチは互いを導き合っていた。詳しくは以下の論文を参照せよ。Ичин К. «Заумь» у Крученых и Малевича // Искусство супрематизма. Белград. 2012.

⁴⁶ 「形象が通常のレリーフと輪郭とを持っていないという意味において、ザーウミ創作は無対象なものである。ところが新しい知覚方法を用いるときは、我々の「無対象性」は、流動的な輪郭で表現される自然のままの完全にリアルな形象性なのである」。Туфанов. Ушкуйники. С. 177. 「新しい知覚」とは、マチューシンの提言する「拡張された視覚」、すなわちトゥファノフの用語では「360°」

うした詩学の磁場の中で創作されたものである。

詩人同盟に提出されたハルムスの詩が朗読された、1925年10月16日に催された詩の夕べの後、「ザーウミ派結社」は「左翼」へと名称変更される。残存する議事録によれば、このとき新たに組織に加盟したボリス・チョールヌイ（1904-?）とヴヴェジェンスキーがトゥファノフの提案した新しい名称を拒絶したため、結局組織は「左翼」と呼ばれることになった。⁴⁷ トウファノフとその弟子たちとの間に漂う不穏な空気が明確に文書化された点で、この議事録は重要である。また、「左翼」グループにおいては、「ザーウミ派結社」に特徴的だった中央集権的性格からの脱皮が図られている。「左翼」の報告メモは、次のように語る。「組織の綱領はジンテーゼではなく、個々のメンバーの綱領の総和である」。⁴⁸ 「ザーウミ派結社」において、トゥファノフが弟子たちを指揮し自らの詩学を彼らに植え付けようとしていたのに対して、「左翼」ではメンバー個々の詩学が尊重されているのである。この転換の裏には、弟子たちのトゥファノフへの反発が隠されているだろう。そもそもトゥファノフが彼らの間で中心的な役割を果たしていた理由の一つは、「ザーウミ派結社」結成時の彼の48歳という年齢である。当時ハルムスは弱冠19歳だったのであり、そこには自然な師弟関係ないし上下関係が前提されていたと見てよい。しかしハルムスは1925年春頃にはヴヴェジェンスキー（1904-1941）、ドゥルスキン（1902-1980）、リパフスキー（1904-1941）ら、同年代の「チナリ」の面々と出会っており、既にトゥファノフにのみ従属する必要がなくなっている。実際、当時計画されていた「ザーウミ派結社」の夕べにハルムスの参加が予定されていなかったのは、彼が「チナリ」との親交の方を好んだことを裏付けている。⁴⁹

の視覚であり、ザーウミ的な知覚である。本来流動的な現実（リアル）を芸術の中で正しく把握するには、流動的な手段、つまりはザーウミを用いねばならない。トゥファノフの考えでは、一見何も意味しない無対象な言葉は、ザーウミ的な知覚においては現実のリアルな反映なのである。

⁴⁷ *Двинятина, Крусанов*. К истории «Левого Фланга». С. 153, 160. バフテレフの回想によれば、「ザーウミ派」という名称を拒絶したヴヴェジェンスキーとハルムスが、「左翼 Левый Фланг」という名称を提案したという。*Бахтерев И.* Когда мы были молодыми // *Заболоцкая Е.В., Македонов А.В., Заболоцкий Н.Н.* (сост.) Воспоминания о Н. Заболоцком. М., 1984. С. 67. ハルムスは最初から「左翼勢力の結集」を目指しており、1926年4月3日には、ヴヴェジェンスキーと連名でパステルナークに手紙を送り、「私たち二人がペテルブルグで唯一の左翼の詩人です」と書いている（4,72）。

⁴⁸ *Двинятина, Крусанов*. К истории «Левого Фланга». С. 177.

⁴⁹ Там же. С. 152-153. この親交によって、ヴヴェジェンスキーとトゥファノフとの距離が接近した。ちなみに「チナリ」というのは、友人同士で結成されたサークルの名前であり、何らかの主義や宣言を掲げる公的な文学グループではない。もっとも、シュピンスキーによれば、この「友好的な一団」は確かに存在していたとはいえ、彼らが「チナリ」という名の下に集まっていたかどうかは疑わしいという。*Шубинский В.* Даниил Хармс: жизнь человека на ветру. СПб., 2008. С. 133. メンバーの一人ドゥルスキンも、「チナリ」と自称することは滅多になかったことを認めている。*Друскин Я.С.* «Чинари» // *Аврора*. 1989. № 6. С. 106. それにもかかわらず、ハルムスとヴヴェジェンスキーは1925-1927年頃まで、自らの著作に「チナリ」と署名していた。バフテレフは「左翼」グループから

ヴヴェジェンスキー／ハルムスとトゥファノフとの間の溝の深まりは、次の事件で決定的になったと推察される。メンバーの一人マルコフ（1900-1982?）とトゥファノフは、ヴヴェジェンスキーの作品を出版する提案に反対したのだ。⁵⁰ バフテレフの回想によれば、「左翼」時代にトゥファノフとヴヴェジェンスキーとの間で口論があったというが、⁵¹ それとも符合する。また、「左翼」が厳格な規律でもってメンバーを縛り付けていた点も見逃せない。集会に対する不真面目な態度へは一時的な除名措置が取られるよう決議され、また定例会議への欠席理由を次の会議で説明させるなど、規律は非常に厳しい様子であったことが窺われる。⁵² メンバーの主義主張を「ジンテーゼ」して単一の主義主張を掲げるのではなく、個々の主義主張の複数性を尊重することを目指しながら、畢竟個人主義を謳いながら、トゥファノフはメンバーたちを抑圧し支配し続けていたのである。つまり、トゥファノフを頂点とするヒエラルキーが形成されていたわけである。1926年1月27日、ヴヴェジェンスキー、ハルムス、ヴィギリャンスキーは遂に「左翼」から脱退、「左翼」自体も消滅することになる。

ここにおいて、トゥファノフとハルムスたちとの離別理由が一つ明瞭になった。それは、ザーウミのナショナリティを巡る詩学の対立ではなく、師弟関係そのものに内在する圧政・抑圧である。単一のグループにしながら単一の理念を目指すことを彼らが嫌った点に関しては、オベリウ宣言の中にもその残響を聞き取ることができる。ザボロツキーは、オベリウの面々が独自の創造的特性を持っていることを述べ、その自由で自発的な結束を強調している。⁵³ つまり、彼らは師弟関係の中で単一の理念に縛られているわけではないのだ。ただし議事録を読む限り、トゥファノフとハルムス双方の間のみで対立が激化している様子は見られない。むしろトゥファノフとヴヴェジェンスキーとの不和の方が目立っている。そしてハルムスは後者に与したのである。⁵⁴ このことは、トゥファノフとハルムスとの対立が、双方の詩学的対立を主要な要因とするわけではないことを示唆している。と

自立していることを示すために二人は「チナリ」と名乗ったと回想しているが、このこともまた、彼らが「チナリ」の方をより好んだことを証言している。Бахтерев. Когда мы были молодыми. С. 67.
⁵⁰ Двинятина, Крусанов. К истории «Левого Фланга». С. 155. なおマルコフが1900年生まれであることは注目に値する。彼はトゥファノフに比べれば遙かに年少であるとはいえ、ハルムスを始めとする他のメンバーより4-5歳年長だった。この年齢差が、彼を他のメンバーよりも上位に置いていたと思われる。

⁵¹ Бахтерев. Когда мы были молодыми. С. 67.

⁵² Двинятина, Крусанов. К истории «Левого Фланга». С. 155, 163.

⁵³ Манифест ОБЭРИУ // Хармс Д.И. Даниил Хармс. В 2 т. М., 1994. Т. 2. С. 281.

⁵⁴ 断っておかねばならないが、ハルムスが文学仲間と仲違いすることは稀で、彼は常に協調を重んじていた。例えばオレイニコフがマルシャークと言い争いをし、シュヴァルツやジトコフも巻き込んでハルムスの周囲に不和を広めていたとき、ハルムスは中立を保ち、「マルシャークの友人でありつつ、オレイニコフやジトコフの友人でもあった」のである。Шварц Е. Живу беспокойно... Л., 1990. С. 245.

はいえ、詩学における争点が皆無だったとは言い切れない。「左翼」脱退以後のハルムスの詩を検証しよう。

3-3. ハルムスの詩学の特徴

オペリウ結成期に書かれたハルムスの一篇の詩を例にとって（1927年10月12日）、この時期における彼の詩学の特徴を幾つか指摘したい。

выходит Мария отвесив поклон
Мария выходит с тоской на крыльцо
а мы забежав на высокий балкон
поём опуская в тарелку лицо
Мария глядит
и рукой шевелит
и тонкой ногой попирает листья
а мы за гитарой поём да поём,
да в ухо трубим непокорной жены
Над нам встоят Золотые дымы
за нашей спиной пробегают коты
поём и свистим на балкончике мы
но смотришь уныло за дерево ты
остался потом башмачёк да платок
да реющий в воздухе круглый балкон
да в бурное небо торчит потолок
Выходит Мария отвесив поклон
и тихо ступает Мария в траву
и видит цветочек на тонком стебле
Она говорит: Я тебя не сорву
я только пройду поклонившись тебе
А мы забежав на балкон высоко
кричим: Поклонись! и гитарой трясём.
Мария глядит и рукой шевелит
и вдруг поклонившись бежит на
крыльцо

マリヤは一礼して外に出る
マリヤは憂鬱そうに玄関に出る
ぼくらは高いバルコニーに駆け寄って
歌を歌いお皿の中に顔を下げながら
マリヤは見つめる
そして手を少し動かして
その細い足で木の葉を踏みつける
ぼくらはギターを抱えて歌いに歌い、
そして我儘な奥さんの耳にラッパを吹き鳴らす
ぼくらの上には金色の煙が立ち上り
ぼくらの背後では猫が駆け過ぎる
バルコニーでぼくらは歌を歌って口笛を吹く
けれど君は木の向こうを陰気に眺めている
それから小さな靴とプラトークが後に残り
中空で丸いバルコニーが飛翔している
荒れた空に天井が突き出している
マリヤは一礼して外に出る
それからマリヤは静かに草地へと足を踏み出す
それからほっそりした茎に咲いた花を見る
彼女は言う。私はあなたを摘み取ったりしないわ
私はただあなたにお辞儀をして通り過ぎるだけ
ぼくらは高くバルコニーに駆け寄ると
叫ぶ。お辞儀してよ！そしてギターを振るわせる。
マリヤは見つめて少し手を振る
それから突然お辞儀をして駆けてゆく
玄関へ

и тонкой ногой попирает листы	その細い足で木の葉を踏みつける
а мы за гитарой поём да поём	ぼくらはギターを抱えて歌いに歌い
да в ухо трубим непокорно<й> жены	そして我儘な奥さんの耳にラッパを吹き鳴らす
да в бурное небо кидаем глаза	そして荒れた空を見遣る (1, 75)

3-3-1. 句読法

まず目に付くのは、詩の冒頭が小文字で始まっていることである。無論、このような大文字と小文字との区別の破壊は未来派の伝統であり、ハルムスが未来派詩人トゥファノフの影響下で詩作を開始したことを想起すれば、これは不思議な現象ではない。句読点やコンマの欠如もやはり未来派の用いた手法の一つであるが、それはこの詩の中でも際立っている。もっとも、句読点やコンマの欠如はこの詩に限らず、初期ハルムスの詩に広く用いられている手法である。しかしこの句読法は未来派のそれとは機能が異なっていると、コ布林スキーは指摘する。彼は 1928 年 11 月 14-18 日に書かれた次のような詩の一節を引用して説明している。

Живешь и сам не знаешь почему
Жизнь уподоблю я мечу. (1, 83)

コ布林スキー曰く、ここでは二通りの解釈が可能である。⁵⁵ すなわち、「не знаешь, почему живешь» (君がなぜ生きているのか君自身が知らない) と «не знаешь, почему я уподоблю жизнь мечу» (私がなぜ人生を刀に喩えるのか君は知らない) の二つである。最初の解釈の場合は、引用された詩行にコンマのあるべき位置は «почему» の後であり、後者の解釈の場合は、その前である。重要なのは、どちらか一方の解釈に決定されることはないということだ。二つの解釈は共存しており、完全に対等である。コ布林スキーによれば、句読点の除去は、「テキストの相対化を発生させる最も重要な手法の一つ」なのである。⁵⁶ これはハルムスのみならずオベリウの詩学であるという。「テキストの相対化」とは、二つ (以上) の対立する定義、形式、バリエント、構造が一つになることなく、共存することである。コ布林スキーはこれをオベリウの詩学における重要な原則とみなしているが、恐らくオベリウ宣言に見られる「言葉の意味の衝突」という概念に極めて近い

⁵⁵ *Кобринский А.А.* Несколько соображений по поводу особенностей обэриутской пунктуации // *Чудакова М.О.* (отв. ред.) *Тыняновский сборник*. Вып. 11: *Девятые Тыняновские чтения. Исследования. Материалы*. М., 2002. С. 401.

⁵⁶ Там же. С. 400.

と思われる。「衝突」についてレーヴィンは次のように説明している。

オベリウ派によって発展させられたノンセンスの詩学が基づいているのは、言葉の通常の辞書的な配置の領域から言葉を移動させ、非慣習的なコンテキストにそれを導入すること——つまり「マニフェスト」において「意味の衝突」と定義されていた作業である。「意味の衝突」は、言葉の慣習的・連想的・論理的なつながりにまさしく違反することによって、言葉の意味の潜在可能性を実現させるのである。⁵⁷

コプリンスキーは「言葉の意味の衝突」から「言葉の意味」を抜き去り、「衝突」を「相対化」に拡張したわけである。「衝突」にしる「相対化」にしる、対立する諸要素が併存するところにその意義がある。レーヴィンはこの概念を単語レベルで読み解いているが、コプリンスキーはより多様なレベルにまで敷衍しているのである。

では、本稿で引用した先の詩において、この句読法はどのように相対化＝衝突を発生させているだろうか。第4-5行に着目しよう。

поём опуская в тарелку лицо

Мария глядит

本来「поём」の直後にコンマが来るべきであることは疑いないものの、しかし「лицо」の直後に来るのがコンマであるかピリオドであるか、決定することはできない。その結果、「опуская в тарелку лицо」という行為の主体が「мы」であるか「Мария」であるか、やはり決定することができなくなってしまう。対立する解釈が併存するわけである。「Мария глядит」の後に本来あるべき前置詞「на」あるいは「в」を伴った目的語が欠如している破格の文法構造も、この解釈の二重性とは無関係ではないだろう。マリヤのしている対象が何か不明であるため、彼女が顔を皿に伏せていても意味が通じてしまうのである。このように、ハルムスの特異な句読法は意味を複数化してしまう。レーヴィンによれば、「言葉の意味の衝突」は「言葉の意味の潜在可能性」を実現させる役割を果たしているが、句読法の領域における「衝突」＝「相対化」もまた、意味を多重化する、意味の領域に関する手法なのである。一見すると形式の実験に過ぎないが、ハルムスの句読法は「意味の潜在可能性」を押し広げることに成功しているのである。]

⁵⁷ Ilya Levin, "The Fifth Meaning of the Motor-Car: Malevich and the Oberiuty," *Soviet Union / Union Sovietique* 5:2 (1978), reprint (Germantown, NY: Periodicals Service Company, 2008), p. 295.

3-3-2. 音の優位

ところで、「опуская в тарелку лицо」という語結合にはやや違和感が残る。通常ならば、「опуская в тарелку глаза」（お皿に目を伏せながら）となるべきではないだろうか。次の行に「Мария глядит」という表現があることから、ここではやはり「視覚」に属する系列の単語が念頭に置かれていたと考えられる。目の連想が、「глядит」という単語を引き出したのである。それにもかかわらずここで「 глаза」という単語が用いられなかったのは、2行前の「Мария выходит с тоской на крыльцо」という詩行と関係している。「крыльцо」と韻を踏むために、「лицо」という単語が選択されたのである。ハルムスが詩作の際に音読を重視していたことは既に述べたが、彼は音というものに極めて大きな関心を抱いていた。その理由は第一に、「音韻機能の復活」を提唱し、弟子たちに音読を強要していたトゥファノフの薫陶の結果であり、第二に、ハルムスが生来持っている志向性である。彼がトゥファノフと出会う前年に書かれた、1924年6月12日の詩の一部を引用しよう。

Ты посмотришь в тишину,
Улыбнешься на луну,
Углынешься на углу,
Покосишься на стену... (4, 153)

「Углынешься на углу」は「Улыбнешься на луну」の音の響きからのみ導出された詩句であり、「Углынешься」は造語である。そしてその造語は音を重視したものであることが明らかである。ハルムスは詩作を始めた最初期に既に音に関心を払っていたのだ。そしてその音への注目、あるいは辞書にはない単語を生み出し、あるいは意外な単語を呼び起こす。1927年2月8日に書かれた劇詩「誘惑 Искушение」から一部を抜粋しよう。

Полковник ручкой помахал	大佐はお手々を振った
и вышел зубом скрежеща	そして出てゆき、歯ぎしりをした
как дым выходит из прыща.	煙がにきびから立ち昇るように。(1,69)

1行目と3行目とが押韻しているのが分かるが、「прыща」（にきび）という単語は恰も「скрежеща」（歯ぎしりする）という単語と韻を踏ませるためだけに選択された言葉であるように思われる。なぜならば、文脈的な意味は完全に閑却され、語義はその音の支配下に置かれているからである。このように音への配慮によって思いがけない単語が選択される現象は、初期ハルムスの詩的テキストには多く見られる。こうした単語の衝突によって、

意外なイメージが立ち現れるのである。「опуская в тарелку лицо」という表現はそれほど奇怪ではないが、しかしハルムスの創作方法の一端を垣間見せてくれる。

3-3-3. 文法的・正書法的違反

次に指摘できるのは、文法的・正書法的間違いである。10行目「Над нам встояют Золотые дымы」という詩行には、「Над нам」という表現が見られるが、これは無論「Над нами」の誤りである。また、「встояют」は「встают」の誤りである。ナヒモフスキー女史が言うように、あらゆる種類の文法的な違反は、ハルムスの初期作品の目立った特徴なのである。⁵⁸ コ布林スキーはとりわけ正書法の誤りを「正書法的ズドヴィーク」として詳述しているが、それは未来派の伝統であるとともに、ハルムス独自の手法でもある。コ布林スキーは次のような例を挙げている。「то ли пово́ра вора»(1, 42)。「повора」は「повара」の間違いであるが、これは直後の「вора」に影響された結果であるという。⁵⁹ 何らかの動機付けがあって正書法が乱される場合があるのだ。では、「Над нам встояют Золотые дымы」という詩行はどうだろうか。興味深いのは、ここでは連続する母音字がほぼ同じだということである。母音字だけを抜き出せば、「а, а, о, ю, о, о, ы, е, ы, ы」となる。ハルムスは付近の母音字に等しいか類似した母音字を、元の正確な単語を変形させてまでもあえて選択することがしばしばあるが、「встают」が「встояют」に変形されているのも、「а」が「ю」に影響された結果、より「ю」に形態の似ている「о」に替わったと考えることが可能だ。「Над нами」ではなく「Над нам」となっているのも、付近に「и」という文字がなく、正確な格変化のままではこの詩行の母音字の並びに相容れないと判断されたためだと考えられる。

3-3-4. 物の本質的な意味を表現する手法

さて、引用した詩には非常に興味深い一行がある。「да реющий в воздухе круглый балкон」がそうである。「バルコニーが飛翔している」とは、いかにも奇妙な語結合である。これは「言葉の意味の衝突」の代表例とみなしてよいだろう。そもそも「バルコニー балкон」という単語は、「お辞儀 поклон」という単語との押韻関係上で引き出されたものである。まずはこの「お辞儀」のモチーフについて一言しておこう。引用した詩において、「お辞儀」や「一礼」という表現は5個確認できる。登場人物であるマリヤは、何か行動

⁵⁸ Alice Stone Nakhimovsky, *Laughter in the Void* (Wien: Wiener Slawistischer Almanach, 1982), p. 52.

⁵⁹ *Кобринский А.А. Поэтика «ОБЭРИУ» в контексте русского литературного авангарда. В 2 т. Т. 1. М., 2000. С. 174.*

を起こす度にお辞儀をしている。あるいはお辞儀することを要求されている。行動がワンパターンに過ぎ、ほとんど操り人形を思わせる。機械性が著しいと言ってもよいだろう。登場人物のこのような非人間性や機械性は、ハルムスの後期の散文によく見られる際立った特徴である。ここでは詳細に立ち入らないが、二点だけを指摘しておこう。つまり、1927年の詩において既に後期的特徴が見られるという事実。そして機械性はしばしば笑いを招来するという事実である。この笑いもまた、ハルムスの散文にしばしば見出される要素である。

だがこの一行は更に別のことを我々に思い出させる。1927年8月8日に書かれた『ダニイル・イワノヴィチ・ハルムスによって発見された物と形 Предметы и фигуры, открытые Даниилом Ивановичем Хармсом』である。ハルムスはここで次のように書いている。「物が5番目の意味、本質的な意味を有するのは人間の外部においてのみであり、すなわちそれは父、家、土を喪失している。そのような物は、**飛翔している**」(2, 306)。⁶⁰ 今「飛翔している」と訳した単語 «РЕЕТ» は、«реющий» の別の変化形であり、同一の単語である。僅か2ヶ月の期間を置いて、詩作品の中で再び «реять» が用いられることになったのであるから、この二つの使用に何らかの関係があると見るのは正当なことだろう。

「5番目の意味」あるいは「本質的な意味」については、既に多くの先行研究があるが、ここでもう一度整理しておこう。無生物で人間によって作られたありとあらゆる物には、4つの作業的な意味と5つ目の本質的な意味がある。最初の4つの意味とは、(1) 図形的な意味（幾何学的な意味）(2) 目的を有する意味（功利主義的意味）(3) 人間に情緒的な作用を及ぼす意味 (4) 人間に審美的な作用を及ぼす意味 のことである。「5番目の意味は、物が存在しているという事実そのものによって決定される。それは物と人との関係の外部にあり、物そのものに奉仕している」(2, 306)。では「物そのもの」とは何か。ザボロツキーの書いたオベリウ宣言の中の「文学的・日常的な外皮を取り除かれた具体的な物」がそれに相当するだろう。⁶¹ そしてそのような物は言葉の意味の衝突によって表現されるのである。

「文学的・日常的な外皮を取り除かれた」物そのものや物それ自体といった概念は、それほど珍しいものではない。オベリウ宣言の中でザボロツキーも「裸の目」という言葉でこの概念を言い表している。⁶² 「裸の目」とは要するに世界を新たに見ようとする穢れない目のことであり、そうして見られた世界＝対象が、物それ自体である。このような概念は、トゥファノフの詩学にも存在していた。いやそもそもザーウミというものが、世界

⁶⁰ 強調箇所は、原文大文字。

⁶¹ Манифест ОБЭРИУ. С. 281.

⁶² Там же.

をよりよく把握するための手段なのである。このとき、ザーウミは「リアルな芸術」へと接続される。

1920年代初頭にトゥファノフがベルクソン哲学と出会った際、主に摂取したのはその「生成 становление」という概念であった。彼はベルクソンに倣い、不動の状態にのみ適用できるものの生成のプロセスには応用できないとして「知性」を斥け、本能と直感を重視した。⁶³ すなわち、不斷に変化し流動し生成している現実を捉えることが可能なのは、「知性」を超越したもの＝ザーウミだけなのである。したがって、当時の彼にとってザーウミは直感的なものに結び付き、理性を凌駕している。それは数年後に「音韻的音楽」と呼ばれることになるだろう。ジャッカーはトゥファノフの詩学を次のように説明している。

世界は流動しており、世界を構成する物は明確な輪郭を持っていない。人間はこの揺れ動く現実にとまらうとしている。そのために人は言葉というレットテルを利用するのだ。芸術の領域において、それはあるいは世界を訂正し、あるいはありのままの世界を表現し、あるいは世界を粉飾する。いずれにしろ、それは理性によって示唆された法則に服従しているに過ぎず、全く現実に対応していないこのシステムの枠組みから出することは不可能である。理性には制約があり、現実の動きをその流動性の中で捉えることはできない。したがって、「超理性＝ザーウミ」に着手して「流動的」に書くほかないのである。⁶⁴

トゥファノフの考えでは、通常の規範的言語では現実を正しく把握することができない。そのため、ザーウミによってそれを為すのである。ザーウミだけがそれを為しうるのである。⁶⁵

ところが1927年のハルムスは、物それ自体を表現するために、「衝突」という手法を用いるようになっていく。「物の本質的な意味」と「言葉の意味の衝突」とを媒介するのが、「*фреть*」である。「飛翔している」のは物の本質的な意味を有する物であり、すなわち「バルコニー」である。「丸いバルコニー」として幾何学的な意味を付与された「バルコニー」は、「飛翔している」という言葉と衝突させられることによって、「文学的・日常的な外皮を取り除かれ」、第5の意味を獲得するのである。

この詩はトゥファノフのザーウミの詩学からハルムスが完全に離反しつつあることを、鮮明に印象付けているとすることができるだろう。トゥファノフとハルムスが共に「流動

⁶³ *Двинатина, Крусанов. К истории «Левого Фланга». С. 149.*

⁶⁴ *Жаккар. Даниил Хармс и конец русского авангарда. С. 48.*

⁶⁵ 注46を参照せよ。

的な世界」や「物の本質的な意味」を表現することに注力していたとしても、その表現方法が既に大きく異なっているのである。前者が通常の辞書にはない言葉＝ザーウミを用いてこれを為そうとしているのに対して、後者は通常の辞書の配置を超越した語用＝言葉の意味の衝突によってこれを為そうとしているのである。しかしながら、そのようなハルムスの「衝突」も実は広義のザーウミの範疇に入りうる。

例えばハンゼン・リョーヴェは「音のザーウミ *звуко-заумь*」と「意味論的ザーウミ *семантическая заумь*」とを区別している。純粹な「音のザーウミ」のテキストでは、言葉は純粹な「音-物」として振る舞い、原初的な感覚の反映を呼び起こす。それに対して「意味論的ザーウミ」のテキストの語創造は、前もって決まっている文法的・意味論的な言語構造を用いるものの、しかし決してコミュニケーションの規範とはならない。⁶⁶ またツィーグラーはクルチョーヌイフのザーウミを「ザーウミ 1」と「ザーウミ 2」に分類した上で、単語より上位のレベルに位置する後者をテレンチエフの詩に見出し、「文法・シンタクス・詩学の点から見れば主に正しい形式で書かれているこれらの詩」において、「破壊されているか、概して欠如しているのは、語彙的・意味論的構築であり、詩行・詩連・詩作品におけるイメージである」と述べている。⁶⁷ このようなイメージの破壊を、ツィーグラーは別の箇所では「イメージのズドヴィーク」と換言しており、その例として「我が魂の鼻眼鏡」「私の気持ちのドアノブ」といった語結合を挙げ、オベリウ宣言の「言葉の意味の衝突」へ読者の注意を促している。⁶⁸ 「意味論的ザーウミ」と「イメージのズドヴィーク」はほぼ同じものを指していると考えてよいだろう。

この文脈から言えば、言葉の意味の衝突とは意味論的ザーウミのことである。1920年代前半におけるトゥファノフの詩学から言葉の意味の衝突へハルムスが移行したということは、すなわち音声的ザーウミから意味論的ザーウミへ移行したということである。引用した詩においては、その移行が鮮やかに示されている。

オベリウ宣言において「言葉の意味の衝突」と表現されたハルムスの手法は、1926年頃より徐々に前景化し始める。仮にトゥファノフーハルムス間に詩学上の対立を見るのであれば、このことを念頭に置くべきだろう。だが、ハルムスはトゥファノフに対してそれほど敵愾心を燃やしていない。「左翼」脱退後、再び文学グループを組織するに当たって、彼はトゥファノフの勧誘を計画していた。⁶⁹ ところがヴヴェジェンスキーとザボロツキー

⁶⁶ Ханзен-лёве Оге А. Русский формализм. Ромашко С.А. (перевод) М., 2001. С. 94. 彼によれば、この「音のザーウミ」の最も徹底した理論家・実践家はクルチョーヌイフである。

⁶⁷ Ziegler R. Группа “41” // Russian Literature. Vol. XVII/1, 1985. С. 82-83.

⁶⁸ Там же. С. 80-81.

⁶⁹ Хармс. Полное собрание сочинений. Записные книжки. Дневник. Кн.1. С. 116. 「左翼」崩壊後も、トゥファノフやマルコフたちとの交友は続いていた。ハルムスの手記には、彼らと出会ったことが一度ならず記されている。Там же. С. 69, 70, 79, 81. また 1927年4月頃には、詩人同盟レニングラー

の反対に遭って、それを撤回しているのである。⁷⁰ ここで我々は、トゥファノフの詩学もまた音声的ザウミからスラヴ語を用いたザウミ（知性を介したザウミ）へと変遷しつつあったことを想起すべきである。トゥファノフとハルムスとの詩的争点は、常にぼかされている。

このように、トゥファノフーハルムス間の対立はそれほど先鋭化しなかったものの、ハルムスにとって個人的にも詩学的にもより近しかったヴヴェジェンスキーらに付く形で、彼はトゥファノフとは別々の道を歩み始めた。また一方で、双方の間に横たわる詩学上の差異——それは対立というよりも単なる差異と言った方がより適切だろう——は、遅かれ早かれハルムスがそのような道に進むことを決定づけていたに違いない。

オベリウ結成期のハルムスは一方で未来派の影響を残しながらも、他方で明らかに独自の詩学を身に付けつつあった。

4. おわりに

従来の説は、ハルムスがトゥファノフから離反した原因を双方のザウミ観の対立に帰していたが、本稿で明らかになったのは、第一にトゥファノフの支配を避けるためにハルムスは彼のグループから離脱したということ、第二にトゥファノフとハルムスとの詩学上の差異が次第に目立ち始めるということである。恐らくこの二つは相互に影響し合っており、一方的な「原因—結果」の関係にはなっていない。トゥファノフからの圧迫に反目したためにハルムスの詩学に変化が生じたわけではないと同様に、逆もまた真ではないのである。ハルムスの身に起きたこの二つの変化は、相互貫入的である。

流動的な世界をありのままの形で把握しようとするトゥファノフのザウミを用いた実験は、本稿で見たようにやがて頓挫してしまうが、これは同時代のロシア・アヴァンギャルドの運命と並行して観察しなければならない。このとき改めて照明の当たるのが、ハルムスの始めた新しい実験である。トゥファノフから距離を置き始めた彼は、音声的ザウミから意味論的ザウミへと手法を変え、そしてやがて詩から散文へと創作の軸足を移すことになる。これは、未来派の実験が別の文学ジャンルへと脱皮する過程なのである。意味論的ザウミが、造語を用いた典型的なザウミの様相を既に呈していないとしても、ザウミというものが無意味の同義語ではなく、あくまで理性を超えた意味＝人間界の外部にある世界の本質を希求するものだとすれば、意味論的ザウミもまたザウミに違いない。それは「言葉の意味の衝突」と名前を変え、ハルムスの新しい詩学を形成するよう

ド支部の理事会のメンバーとして活動することをハルムスは目論んだが、彼が想定していた新しい委員には、トゥファノフも含まれていた。Кукушкина. Александр Введенский и Даниил Хармс. С. 556.

⁷⁰ Двинятина, Крусанов. К истории «Левого Фланга». С. 156.

になる。未来派の伝統は、トゥファノフによって終わりを告げ、ハルムスによって甦る。この二人を対照させることで、彼らがロシア・アヴァンギャルドの挫折と変質をそれぞれ体現していることが分かるのである。

Почему Хармс отошел от Туфанова: с точки зрения человеческих отношений и поэтики

ОДЗАВА Хироюки

Цель данного исследования заключается в выявлении причины того, что Хармс отошел от Туфанова. В 1925 году Хармс участвовал в «Ордене заумников DSO», который создал Туфанов, и вместе с ним занимался литературной деятельностью. Но постепенно расстояние между ними увеличивалось.

Существует точка зрения, что Хармс отошел от Туфанова из-за разницы во взглядах на заумь: Туфанов требовал от зауми международной, а Хармс — национальной. Но это не соответствует фактам. Во-первых, заумь у Туфанова постепенно приобретает национальный славянский характер, а во-вторых, не совсем выясняется национальная основа зауми у Хармса.

Почему же Хармс вышел из группы Туфанова? Данная работа рассматривает две причины. Первая является человеческими отношениями (т. е. связана с отношениями между членами группы). Туфанов относился к молодым поэтам как метр и царствовал на вершине иерархии, ограничивая частную литературную свободу других членов группы. Сочувствуя Введенскому, который протестовал против Туфанова, Хармс также от него отошел.

Вторая причина кроется в различии поэтик Хармса и Туфанова. Хармс вышел из группы Туфанова не из-за расхождений во взглядах на заумь, а по причине разницы творческих методов. Как Туфанов, так и Хармс думали, что стихи должны охватить «суть» мира и для этого необходимо использовать необычную манеру выражения. Однако при этом Туфанов использовал абстрактную заумь, а Хармс — семантическую.